

批評・紹介

Rebellion and Its Enemies in Late Imperial China—Militarization and Social Structure, 1796—1864

Philip A. Kuhn
Harvard University Press,
Cambridge, 1970

本書はハーバート・東アジア・シリーズ Harvard East Asian Series 49 の一つとして出版されたものであり、著者はフリップ・クーン氏（シカゴ大學助教授）である。氏は數年前に京都大學において中國近代史を研修され、その卓絶した見識は、日本の研究者におおくの刺激を與え、氏よりアメリカにおける近代史研究の動向を十分に窺うことができたのである。氏は前書きで、本書はフエアバンク教授の業績と指導、更にはシュウォルツ氏、楊聯陞氏等の助言によるところが多大であるとのべているが、まさに現代のアメリカにおける近代史研究の凡ての成果の上にたつた業績といえよう。周知の如く最近アメリカではハーバート大學を中心に、近代史研究の著作が續々と發表されてきているが、これらの研究成果に關しては、わが國にはほとんど紹介されていないのが現状である。ただ、部分的には、フエアバンク氏の條約體制、及びシナキー（漢民族と異民族の共同統治）の研究、スキナー氏の市場圈の研究、シュ

ウォルツ氏の中國共產黨史にみられる如く、わが國にも紹介されて研究者の關心を惹起したのも若干ある。しかし、全般には兩國の近代史研究の立場ないし問題意識のずれもあり、研究の交流は進んでいないといつても過言ではない。しかし吾々としては、その立場ないし問題意識のずれがあるにせよ、アメリカにおける近代史研究の動向を十分に検討し、その成果を吸収することは、歴史學の發展にとつて必要であると考え。そういう意味で、最近とくに中國近代史研究でユークナな見解を發表し、注目をあびているクーン氏の研究を紹介することは、十分價值あることであると思われる。

さて本書の構成は次の通りである。

第一章 地方の自衛軍 Local Militia と傳統國家

第二章 清朝の自衛軍に對する政策の發展（一七九六—一八五〇）

第三章 華中、華南における地方の軍團化 Local Militarization の構造

第四章 反亂の勃發と正統士大夫 Orthodox Elite の軍團化

第五章 軍團化における對應するヒエラルキー

第六章 自衛軍・國家・革命

この構成からもわかるように本書の内容は主として清末における傳統の中華帝國の崩壞過程にあらわれる各種の反亂と、それに對處する郷紳層を中心とした地方自衛軍の形成過程である。氏によればいわゆる中國近代史研究において定説化しつつあるウェスタン・インパクトによる中華帝國の崩壞を寧ろ二次的な要因とみなしている。

著者は第一章第一節において「近代史の領域」と題し、十九世紀初にすでに弱體化した清朝が、強大な武力を後楯とした西洋列強

の領土擴張という新しい挑戰に直面したのであるとする。このことは列強の侵入以前に、既に清朝國家體制内部に、從來の王朝交替の際にあらわれる變化とは異質な様相がみえると考え、それを氏は白蓮教に始まる一連の反亂の中から形成されてきた郷紳の自衛軍團化 Militarization という動向に求めようとするのである。氏によれば郷紳とは官僚政治と郷村社會とを連結させる生きた環節であり、國家權力に保護されつつ種々の特權を享受する存在であると規定し、これが軍團化の形成に重要な役割を果すとしている。最近わが國においても郷紳の政治的、社會的機能をもつて研究の對象としているが、清末における郷村の實態を把握するためにも、あらゆる角度からの考察が期待されるところである。ところで氏の見解によれば、郷紳の軍團化が進行した背景を清朝中期以降の人口増加に伴い、流民化した農民が盜賊となり、これが郷村を脅したところに求めている。この見解は一面では妥當であろうが、流民及び反亂の背景を人口増加のみに限定するところに検討の餘地があり、白蓮教徒のスローガンである「官逼民反」という階級的視點が缺如している。いま一つ重要な點は、傳統社會に變化をもたらしした要因として、このような清朝中期以降の内部的崩壊と、それに對處する軍事體制のみを重視する見解である。確かに氏の指摘する如く、阿片戰爭以前に獨裁君主體制とそれを支えている郷村社會の矛盾は進行し、内部からの崩壊の徴候はみえ始めていた。しかるに舊體制中國の崩壊を決定したといふのは、やはり外國資本主義の世界市場形成過程であつたとはいえないだろうか。即ち阿片戰爭そのものが阿片貿易と銀の流出、それにイギリスの産業革命に伴なう海外市場擴大の政策がもたらしたものであり、このような外部的要因のもたらした影響こそ

が、舊中國の内部からの崩壊を速めた事實は否定できないであらう。また氏の見解では内部的要因を重視するがために、そこから必然的に反亂に對處する郷紳の存在がクローズ・アップされる。中國近代史の進むべき方向からみるならば、反亂をおこした民衆の運動に焦點を置くことが課題となっており、郷紳は寧ろ副次的な存在となつてゐる。然しだからといって郷紳の存在を過小評價するのであれば、中國近代史を立體的・構造的に把握しえないであらう。その點から言つて氏が清末における軍事體制の中での郷紳の役割を分析された意義はそれなりに認めなければならぬ。

第二節では「兵制の歴史的意義」と題して、まづ國民皆兵の典型としての府兵制についてその系譜と、行政と用兵の分離に注目し、これが明清期の軍制の發達に影響を及ぼしたことを説く。軍制に關する二つの基本的なパターンとして、(一) 國家の制度としての兵制、(二) 自然發生的なものをあげ、ここから國家と社會の分離をとくウィットフォーゲル等の東洋社會に關する理論を批判している。氏によればこの兩者は密接に連關しており、地方軍事制度に關して言えば、その結合のあらわれとして團練があつたとする。

第二章では清朝の軍事政策の發達をのべる。まづ白蓮教の反亂の際に、方積・龔景瀚・嚴如煜などの士大夫によつて提唱された地方防護策に關して、特に龔景瀚・嚴如煜においては團練は單なる外敵に對する地方防衛のための軍團ではなく、郷村内部の制御のためにも存在したとする。次に太平天國期における清朝の軍政について論じ、阿片戰爭後に廣東に始まつた地方軍團化の潮流は官界より惹き起されたのではなく、官界がそれに對應せねばならなかつた挑戰であつたとする。耆英は團練を既存の保甲に基礎を置くことを建言し

た。また許乃釗は保甲は相互監視と連帶責任によつて善惡を判別し、團練は外敵に對する防備を目的にしよとしたとのべ、氏はここに鄉村内部における制御と、官側からの統制という二重性の本質を認めようとする。更に團練の指導層が郷紳であること、官僚國家の末端機構であること、それが長い歴史的傳統に基いていることからみて、三元里にみられる鬭争を、唐突な愛國主義に刺激されて生じたものでないと斷言している。

第三章では、華中・華南における地方軍團化 Local Militarization の構造についてのべている。まず地方軍團化の最少の單位としての村落において、まず自衛のための小軍團 Simplex Tuan が編成される。このリーダーは生員層の下級士人である。これが數箇結合して複合軍團 Multiplex Tuan となる。リーダーはマーケット・タウンの舉人・進士層であり、かれが中心となつて總局を設立する。

ここに村落社會と官界とを連結する紐帶が成立する。更にこの複合軍團が數箇結びついて擴大複合軍團 Extended-Multiplex Tuan となる。この擴大軍團の首腦は廣大な地域より人力・資金を調達することが可能となる。氏はこのような實例として三元里抗爭の基盤となつた昇平社をあげている。即ち昇平社は集團防衛・食糧調達・飢饉救助などを目的として、村落（郷）に小軍團が結成され、數郷が連合して社となり、更にこれが連合して昇平社のような大軍團が形成されたとする。このような大團が結成されると、朝廷に報告して、その恒常化を保證してもらふ。氏はこのような擴大軍團が市場圏の中核としての地方都市に形成されていく過程をスキナー氏の市場構造の原理に導かれつつのべている。ただこの市場都市は商業上よりも軍事的な意味においてより重要であるとし、かくして市場セ

ンターと團練の間の結合によつて、商業構造よりはむしろ商業と軍事の兩方を結びつける存在となつてゐると指摘する。更に氏は、團を結合させる要素としての血縁共同體 Lineage の重要性にふれてゐる。例えば南昌縣にある中州の團練局は、劉子潯の血縁を中心に形成されたものである。官側はこのような血縁及び地縁にもとづく自然發生的な地域結合（郷・約・社）を人為的かつ行政的な保甲に一致させようとする。ところが保甲は乾隆以後にあつては完全に無秩序化してゐた。従つて、太平天國の勃發以後に特にみられた自然發生的な地域結合と行政的な保甲とを一致させようとする官側の努力は、必ずしも豫期した成果をあげることはできなかった。このような地方軍事の財政的な基盤は捐納等であつたが、政府でさえも有力な郷紳が管轄する團練局の會計業務には干渉できなかったのである。郷紳は元來、包攬等を通して地方財政を委託されてきた。包攬は、①郷紳自身の利益追求のため、②地域社會を官側の搾取から自衛するためという二つの側面があつた。郷紳は舊來の里甲制を、自己及び村落の權力増大に利用したのである。この第三章は本書の中でも尤もユニークな研究といつてよい。從來、團練・保甲制の研究において缺如していたのは、歴史的必然性に基づく構造的把握であつた。團練・保甲を體制擁護のための機構として位置づけるだけでは、昇平社の三元里抗爭は説明できないであらう。尤もこの三元里抗爭は、農民・郷紳のいづれが主體となつたものかという點については、見解の相違はあるが、この點は今はいふれないでおく。ただ、あのような巨大なエネルギーを發揮しえた昇平社について、その構造を分析するのではなれば、中國近代史が平面的な叙述に終る危惧がある。この問題につき構造的な分析を試みた著者の意圖は高く評價

せねばならない。

第四章「反亂の勃發と正統士大夫の軍團化」。ここで氏はまず江忠源の楚勇について説明する。楚勇は藍正樟・雷再浩・李沅發等の反亂の續出という情況から、江忠源の血縁を中心に新寧士人の指導のもとに結成された。次に胡林翼の親兵 personal army の形成過程についてのべる。胡林翼の地方秩序に對する基本的な原則は、郷紳の助力によつて保甲と團練組織とを結合させ、その基盤の上に親兵を結成する。ここで氏は蕩安における郷約についてのべ、官側の統制を逸脱して抗糧鬪争をくり廣げた蕩安の軍團を、ついに官側の統制のもとに従屬させた實例として提示している。胡林翼のいう官側の統制とは、鄉村秩序の責任を郷紳に負わせることであり、このことにより保甲制を實質化することであつた。次に氏は湘勇と曾國藩の關係について論を進める。ここでは氏は團練大使が設置された經緯を、朝廷が團練と保甲を同一視し、團練を獎勵することが、とりもなおさず保甲を復活することにつながると考えたからであるとする。従つて團練大使の任命は、清朝が軍制の改革を意圖したものではなく、すでに進行しつつある團練の設立を統制することに意義があつたとする。ここから團練の大部分は形骸化され、保甲の代行として作用せざるを得なかつた。曾國藩は團練大使に任命されるとこの政策を推進している。ところが曾國藩は一方では、勇軍の結成を行なつた。その特色をいえば、團體訓練と個人的忠誠を媒介とするものであつた。ここで氏は曾國藩と同盟して南昌防護に重要な役割を果たした劉于濤の血縁共同體につき再びふれ、劉于濤の血縁を中心として結成された江西の團練局は、主として籌餉と勒捐を擔當した。曾國藩は江西の釐金を財源とし、兵力は湖南、湖北より調達し

た。然しこのことにより劉于濤の血縁共同體に對する官側の擄取が増加し、その内部の地主、佃戸間の階級緊張を益々増大させ、それを回避しようとした劉于濤の努力も空しく、彼自身は軍資を着服したという理由で彈劾される。この章では、いわゆる郷勇の形成過程を、その構造分析を試みながら展開している。血縁關係を中軸に結成された村落共同體の防備機構である團練が、連合して擴大されたものが勇である。勇は高度の機動性とその専門化によつて團練と區別される。たとえば江忠源・胡林翼の勇がこれに該當する。このような勇が高次のレベルに集中され、一定の方向性が示されると地方軍 regional army に轉化する。地方軍(郷勇)においては、個人的忠誠を紐帶として各人が結合しているので、中央からの指令も容易に浸透する。これが曾國藩の郷勇である。ここでは個人の忠誠を中軸として血縁・地縁・同學等、凡ゆる關係が利用されて内部の結束が固められ、名教の護持という大義名分がスローガンとなつてくる。又、財源も郷村が負擔するのではなく、政府より正規の俸給が支給される。その資金源として釐金が充てられる。氏がこの論を展開するに當つて地方軍結成の過程を團勇―郷勇の三段階に分け、その内部構造を分析した點は、甚だユニークな見解といえる。

この傳統社會における三段階の軍事構造の形成過程を、反體制的な秘密結社等の社會構造にも適用して分析を試みるのが、第五章「軍團化における對應するヒエラルキー(正統と異端)」である。即ち氏は傳統社會と秘密社會においては、その政治、思想上の相違にもかかわらず、同種のヒエラルキーが認められることを假説として提示している。即ち前述した傳統社會のヒエラルキーにおける、團

練一勇一地方軍の構成は、秘密結社の堂・股一軍團社會 community of arms に對應する。堂は歴史的には水滸傳の山堂の如き例があるが、それは神祕的・宗教的というより現世的な性格をもつ。清末に及んで華南にみられる米飯主というのは、リーダーは三合會の組織者であり、官界の腐敗と經濟恐怖等により鄉村社會に成立した反官組織である。次に股であるが、これも阿片戰爭後に、とくに華南地方に顯著にあらわれてくる。股は地域社會より逸脱したもの、あるいは、阿片戰爭後に除隊したものなどから構成される。股は堂よりも規模が大きく、行動範圍も廣くなつて、反政府的色彩をも帯びてくる。華南の陳亞貴・張劍・田方等の艇匪というのがその例として挙げられる。次に軍團社會として太平天國がある。太平天國の主體は客家であり、本地から疎外されて結成された結合體であり、農民・鑛夫・炭焼等から構成されており、運動のビジョンをもつ。

氏はこのように正統・異端の軍事構造を對比した上で、この二つの社會における相互作用と統合について分析する。まず類似した段階における正統（團）と異端（堂）の相互作用、二者擇一の形態として湖南・劉陽の微義堂の場合を取上げる。三合會の會員である周國虞を指導者としたこの堂は、一八四二年の鍾人杰の反亂に際し結束を強めた。ところが太平天國運動が進展するにつれ、太平天國からの働きかけもあつて内部が動搖をきたした。以前より周國虞と敵對關係にあつた生員・王應夔が周國虞を官憲に告訴したのが契機となつて、周國虞の部下である曾世珍・鄧萬發が蜂起する。この騒起に周國虞自身は躊躇していたが、もはやその統制はきかなくなつていた。ここから氏は周國虞が三合會に加盟していたことが、彼が地

方軍團のリーダーに推擧される尤も重要な要素ではなく、より重要なのは復合軍團の首長としての彼の地域社會における地位であつた。従つてこの軍團の内部的結合が弛緩すれば、周國虞自身も破綻してしまふのである。この周國虞が指導する堂からもわかるように、地方自衛組織が復合化すると、しばしば官制と抵觸することになる。官側で團匪とよんでいる場合は、もともと正統なる自衛組織が官僚との鬭争の結果、異端視されるからである。逆に異端の堂が招聘されて官側の正統なる團となつた張國樑の場合もある。かくして地方軍團化の結成過程からみて正統と異端とはもともと差異がないのであり、官側の對應の仕方如何によつて區分されたものであることを指摘している。

次に氏は正統なる組織間にもみられた異つた段階、即ち團から勇へと統合されていく過程にみられる困難さが、異端側の堂・股が太平天國に吸収される過程の中にも窺うことができるという。即ち太平天國と三合會との關係において、三合會の會員であつた羅大綱のように太平天國での高位を得た場合もあるが、概して太平天國は地方反體制グループと共同して有効な軍事ヒエラルキーを作りえなかつた。その理由は、三合會が復明を主張しながらあくまで地方段階での軍事組織であつたのに對し、太平天國は正統社會側からの分斷と壓力により生じた選民という信仰が、好戰的な救世主義 *day of judgment* を促進させ、清朝打倒と太平天國の建國という未來に對するビジョンをもつて行動した。このことが地方異端組織との連携を阻止させることになつたと言う。ところが正統側の軍事ヒエラルキーは、イデオロギーによるのでなく、個人關係の密接なネットワークから生れたものであつて、士大夫の傳統的理念がその基礎となつて

いる。ここで氏は湘勇の指揮系統を整理して、それが血縁・地縁・學閥・師弟關係など、積年の保護と忠誠により密接に結ばれたものであることを明らかにした。即ち氏は湘勇の指揮者が阿片戰爭前後に形成された經世家グループと密接に連つてゐることをまず指摘する。嘉道期に經世政治家として登場してきた鹽政の改革者・陶澍、その同僚で阿片嚴禁を實施した林則徐のブレン・魏源、更には魏源に依頼して皇朝經世文編を編集せしめた賀長齡等はいずれも湖南出身であり、彼等は固く結ばれており、この中から咸豐期になると、胡林翼・左宗棠・曾國藩・劉坤一等の實踐的政治家を輩出するのであり、このような環境のもつ意義は確かに大きい。氏は湖南の地理的位置は「獨立獨行」の氣風と、反面には中央志向型の二つの性格が生じ易く、このような位置を背景に強力な地方軍閥が形成されたという。經世思想の系譜と湖南の氣勢を分析することは確かに中國近代思想史のみならず政治史をもはかる尺度とならう。この點わが國においてはすでに小野川秀美氏が、變法期の湖南省の分析をされ、當地を排外運動と名教護持の強い保守派と、改革の急先鋒となつた革新派の相剋という過程の中で把握された秀れた研究があるが、これを洋務期との連關の上でとらえた研究は、まだなされてない。即ち多くの經世家を輩出し、湘勇が形成され、當時時代の先端にあつた湖南が、戊戌の變法期にはやはり變革運動の據點となり、名教を否定する譚嗣同の如き急進的な變法論者を生んだ。ところが譚嗣同は湘勇の不正を指摘するなど、それに否定的な立場をとり、洋務派と一線を畫するのであるが、このような思想・政策の轉換がいかなる情況のもとで生じたかを知ることが重要であらう。湘勇の形成過程に重點を置く氏の論旨では、それが内部の結合力の弱

體化と共に墮落した軍隊となり、士人の批判を受けて解散せざるを得なかつた點についての説明がなされていない。

第六章は「自衛軍・國家・革命」と題し、まづ太平天國の戰略問題について記している。氏は舊中國の暴動による權力奪取を三つの形態に分類し、①盜賊集團が政府の軍事力を破壊し吸収する。②帝國の行政都市を奪い取る。③生産力と軍事力を安定する爲に鄉村を支配するをあげ、この内①と③は密接に關連しているという。太平天國は地方政權を確立する試みとして天朝田畝制度を構想し、文官系統と軍事系統として文武の兩司馬が設置されたが、この理想的組織は實現困難であつた。その理由としては有能な幹部の不足によつて結局は團練など土着の地域社會の權力構造によつて左右されたからである。例えば、太平天國は土豪の徐佩璣と妥協したが、これは清朝の官僚と接觸を保つた。太平天國が前述した③の政策に失敗したことは、②にも影響を及ぼし、その運動を挫折させることになる。

一方清朝が地方土豪の團練局を保護する政策を取る場合は、これらは黃岡その他の地域にみられる如く清朝に協力した。氏は天朝田畝制度をその軍事體制の側面から考察し、周禮に基づくその理想主義的制度も實際の鄉村社會に生かしえなかつたという。從來、天朝田畝制度については、そのスローガンである土地均分問題を重視し、結局はそれが實現困難であつたとする研究は多い。その理由として、太平天國が郷官制を通じて地方の郷紳・土豪と妥協せざるを得なかつたところにあるとするのであるが、この點に關しては氏の研究方向と一致している。ところで太平天國初期において、腐敗した官軍に比較して、太平軍は規律を守り統制がとれてゐたこと、又、そのような太平軍を鄉村の貧農層が歡迎したという事實を官側

の資料の中にも見出せることは、太平天國が少くとも天朝田畝制度を實現しようとした意欲はあったものと思われる。氏はこのような點に關しては殆んどふれていないが、太平天國運動を客觀的に評價するために指摘しておく。

第二節「傳統國家の崩壞（地方政府の軍團化の影響）」では、太平天國以後の問題を取り扱っている。軍事制度における新しい軍隊の影響と、地方分權の發達については多く研究されているが、太平天國期の地方軍團化が地方段階における中國行政の性格に影響を及ぼし、更に共和國成立以後に於いても地方行政と郷紳にもその影響が根強く殘存している點はほとんど研究されていないという。郷紳という階層が、單に科擧制度や舊制度に附帶していた特權の廢止で消滅したというのではなく、それがどの様にして變化する環境に適應しようとしたかということが近代中國社會史研究の課題である。その爲には太平天國に續く數十年間の郷紳の状態と、その状態を形造る地方軍團化の役割を検討することにあるという。氏は地方では團練が徵稅・警察・徵兵の機能をもった單位として形成され、官側がそれを保甲制に一致せよとしたこと、結果として地方郷紳が手中に収めている保甲は、咸豐以後の地方の郷村社會には普遍的な様相であつたことを指摘し、ここで焦點を共和國成立前後にあてて。かくして氏は、十九世紀から二十世紀初の中國社會發展をとく糸口として、地方自治運動に着目し、これが日本の影響によるものであるとしながらも、清末でいう自治は代議政治も地方自治も意味せず、官治の補助機關にすぎないとする。民國以後に地方自治綱領がつくられ、自治區・區長・區董が設置された。ところが區は自治という外見上の新なる装いにもかかわらず、舊來の擴大複合集團か

ら發展してきた郷紳の組織であり、都はさらにそれが連合したものである。かくして郷紳は區長となり派捐等により財富を蓄積した。このようにして二十世紀まで郷紳は生きのびた。ところが近代化の潮流が都市に及び、都會風のエリートを成立させ始めると、前近代化と近代化との斷絶が生じ、それがそのまま郷村と都市のギャップとしてあらわれる。近代化した都會のエリートは、もはや市場町・地方都市という前近代化との接觸が、ますます困難となる。かくして都市エリートは郷村の問題を解決するに、何らの提案もしなくなり無關心になる。従つて郷村の再建を叫ぶ梁漱冥・陶行知たちの努力を十分くみとることができなかった。國民黨の政策が失敗したのも現代化した都市文化に基盤をもち、郷村のエリートを十分把握できなかったところにもある。この國民黨の失敗は、そっくり日本軍にも繼承されている。これに對して共產黨の指導の下に華北地方に發達してきた地方軍團化の構造は、十九世紀中頃にみられた正統軍團のヒエラルキーに著しく類似しているとなし、このような意味で、その研究することは有益であるとする。氏は結局のところ十九世紀中頃以來、郷村に組織化されてきた軍團化の構造が、正統・異端を問わず中國社會を規定する重要な要素であつたことを力説されている。ここで思い出されるのは、毛澤東の所謂「農村は都市を包圍する」という有名なテーゼである。中國のような傳統的な農業國家にあつては、農村を組織し強固にすることが戰略上においても重要であつたわけである。共產黨がこの原則に従つて革命を成功させた觀點からみて、氏の指摘も當を得たものと言えよう。ただ氏に於ては、その軍團化の構造分析に視點がおかれた關係上、その歴史的側面は必ずしも十分とはいえない。これは氏のみならず概して

社會學の見地にたつて歴史事象を研究する人々がおちいりやすい缺點だが、氏の場合に例して言えば、白蓮教の亂に始まり中國共產黨の成立に至る中國史を郷村の軍事化の過程で把握するのであるならば、その構造のみならず、その歴史的展開を系譜的に述べる必要があるのではないか。氏によれば正統と異端の軍國化は構造的に類似していたというが、その反面、たえずイデオロギーの面で烈しい相剋がみられ、やがてその異端と言うべき中國共產黨が政權を獲得した歴史的事實の分析は、氏の見解にはみられない。これは一つには氏の叙述が、地方郷紳の指導のもとにおける軍國化の構造分析に力

點を置かれたところに由來している。即ち郷紳は概して異端運動を抑壓する立場にあつたのであり、これに抵抗しつつ形成されてきた運動は、氏の目からみればあくまで副次的なものであつた。

以上本書を通觀して感じた點を幾つかのべてみた。わが國の歴史學界にあつては、氏の如く社會學の見地に立つた研究が少ないだけでなく、その方法論すら確立していない状態である。その點、本書が近代史研究に一つの假説を提示したことは、研究に値する價値をもっているといえよう。今後、著者が益々研究に精進され、實りある業績をあげらんことを衷心より願うものである。(大谷 敏夫)